
W
AFTER
SCHIELE
18

TRAFALGAR. LAW Commentary Vol.1



22ページから始まる『ONE PIECE novel LAW』の主人公、トラファルガー・ロー。〝超新星〟と呼ばれ、王下七武海にもなった彼は順風満帆な海賊人生を送ってきたかの様に見える。だが、真実はその真逆。想像を絶する試練を超えてきたのだ。

〝白い町〟で生まれた少年の過酷すぎる運命…!!

ローが生まれた国は〝白い町〟と呼ばれた「フレバンス」。童話の雪国の様に地面も草木も真っ白な、この世とは思えないほど美しい国だったという。

ローは国一番の名医と言われた父と、同じく医学に携わる母の間に生まれた。元気な妹と家族4人、何不自由もなく、とても幸せな生活を送っていた。

だが〝フレバンスの悲劇〟がローのその後の運命を大きく変えた。当時、フレバンスで盛んに行われていた「珀鉛採掘」の影響で、国中の人々が病に倒れ、次々と死んでいったのである。原因は鉛中毒。肌や髪がみるみる白くなり、全身の痛みと共に死に至るその病は「珀鉛病」と呼ばれ、周辺各国に恐れられた。悲劇の始まりである…。



▲おびただしい死体の山を見るだけでも、10歳の少年には耐え難い事だったはずだが、ローは心を殺し、生き残る選択をした。

珀鉛病を伝染病だと思い込んだ隣接する国々は、〝白い町〟の八方から通路を塞ぎ、隔離処置をとった。そして、他国での治療や移住を試みたフレバンス国民達を、次々と射殺したのである。怒りに震えるフレバンス国民は、猛反撃を開始。かくして血で血を洗う凄惨な「戦争」が始まってしまった。

当時10歳だったローは、珀鉛病にかかってしまった妹・ラミの面倒を見ていた。だが、珀鉛病の治療法を模索していた両親は戦争に巻き込まれ落命。入院していた妹も、病院ごと焼かれて、帰らぬ人となった。容赦なき隣接各国の攻撃は、聖職者や子供達の乗る避難船すら破壊し、フレバンス国民を徹底的に〝駆除〟した。美しかった街は火の海に呑まれ、まさに地獄絵図。「人々の憧れの国」だったフレバンスは滅亡し、幻の国となったのだった。

一方、家族を失い天涯孤独となったローは、逃げる事に必死だった。他国の人間に見つかれば殺されてしまう。そんなローの目に留まったのは、焼け跡から他所へ運び出されるおびただしい数の死体。息を潜めて死体の山に潜り込んだローは、そのまま国境を越える事に成功。命を繋ぐ事ができた。

だが、そんなローも、自身の体の変化に気が付いていた。彼も例外なく、すでに珀鉛病にかかっていたのだ…。「3年と2ヵ月」、それが医者だった両親の医療データを見てくだした、自分自身の余命だった…。

命懸けで国境を抜けたローは、港町「スパイダーマイルズ」に辿り着く。10歳にしてこの世の地獄を見た彼に、もはや恐れるものなど何もなく、ゴミ処理場にたむろしていた海賊達に接触する。海賊達の名は、ディアマンテとトレーボル。ドンキホーテファミリーの〝最高幹部〟である。

「3年以内にたくさん殺して…全部ブッ壊したい!!!」――殺意に満ちた目でそう語る少年の姿は二人の目に留まり、ローはドンキホーテファミリーに紹介される事となった。

参入した子供のほとんどは2日以内に逃げ出すという地獄を見てきたローにとっては、耐えられないものではなかった。



▲珀鉛病の恐ろしい所は、次世代へも影響が続く事である。親世代が鉛中毒になると子世代の寿命が縮み、その孫世代はさらに短命となってしまうのだ。



▲珀鉛病は恐ろしい病気だが、中毒であり伝染病ではない。治療法を模索していたローの父は志半ばで殺されてしまう。

〝迫害〟が少年の心を蝕む…!!

目を閉じれば思い浮かぶのは、地に伏した両親の姿と燃える病院。10歳の少年の人格が崩壊するには、十分な出来事だった。信じられるものはもはや何も無く、死ぬ事ですら恐れなくなった。ただただ、目に映るもの全てを破壊したい…その歪んだ願望は皮肉にもファミリーのボス、ドフラミンゴに近く、少年ローの心の闇は、裏社会の住人そのものに染まっていった…。

一方で、ローがドンキホーテファミリーに入ってから、早々に因縁をつけてきた男がいた。〝子供嫌い〟のコラソン…ドフラミンゴの実の弟である。コラソンは無口な男だったが、ローを見つけると、黙って外へ放り投げた。

一週間が経ち、ファミリーにローの存在は認められ始めていたがコラソンの態度は変わらない。ローのコラソンに対する殺意は日に日に増していった。

ある時、一人で新聞を読んでいたコラソンの不意を突いて、ローは刃物でコラソンを刺した。だが、一撃で致命傷にはならず、ファミリーの他のメンバーに、現場を見られてしまった…!!

ドンキホーテファミリーは敵対する者に対しては非道の限りを尽くすが、仲間、とりわけ古くからドフラミンゴと共に行動してきた〝家族〟に対しては手厚い。ファミリー幹部に危害を加えたり、侮辱した者に対しては、徹底的に制裁を加える〝血の掟〟があるほどだ。ましてコラソンはドフラミンゴの実の弟。現場を見たバッファローは買収したものの、コラソンが生きて報告すれば一巻の終わり。ドフラミンゴに連れ戻された時ローは死を覚悟した。

だが、ローが呼ばれたのは処罰の為ではなかった。ローの〝素質〟を見抜いたドフラミンゴが、彼を正式にドンキホーテ海賊団に迎えたい、という話だった。コラソンは昔ショッキングな事件があった影響で、言葉が喋れない。だが、いつもコミュニケーションをとる際にそうする様に、「書いて」報告する事もできるはずだ。だがコラソンは、ローの事をドフラミンゴに報告せず、自分で傷の手当をしていた。

「何考えてんだ!? あいつ……!!」

――コラソンはなぜ報告しなかったのか。なぜ刺されてもなお平然としているのか。ローは分からなくなっていた。

コラソンとロー

コラソンに対する疑問は解消される事なく2年の時が過ぎた。勉学、射撃、格闘、剣術など、ファミリー幹部から様々な手ほどきを受けたローは、着実に強くなっていった。また、同じく孤児でファミリーに入った、同年代のベビー5(ファイブ)やバッファローとは話す機会も増えた。ローはそこで、誰にも言ってなかった自身の「隠し名」と「忌み名」を教えてしまう。「トラファルガー・〝D(ディー)〟・ワーテル・ロー」。それが、ローの真の名前だった。バッファローとベビー5は、その名にさして興味を持たなかったが、代わりにコラソンにすごい勢いで他所へ連れていかれた。

「さっきの話は本当か!?」

喋れないはずのコラソンが初めて喋った。ローが衝撃を受けている間にコラソンは話し続ける。

「隠し名〝D〟…それが本当なら、出ていけ。ドフィから離れろ!!ロー、お前は、あいつと一緒にいちゃいけねェ人間だ!!!」

コラソンはローにドフラミンゴの下を離れる事を強く推した。だが全てを憎み、破壊しようとファミリーに入ったローに、コラソンの言葉は届かない。逆に、ローはコラソンがファミリーにも隠していた「本当は喋れる事」と、「実は悪魔の実の能力者である事」をドフラミンゴに報告しようと考えた。2年前と全く逆の立場になったのだ。

結論から言うと、ローは「報告しなかった」。コラソンへの不信感はあったが、2年前に「刺した時」、黙っていてもらった「借り」があったからだ。

だが、その後のコラソンの行動は、さらに予想外のものだった。コラソンはローを誘拐し、ドンキホーテファミリーから脱走したのだ。わめくローを尻目に、コラソンが探していたものは病院。あらゆる病院を回って、ローの〝珀鉛病〟を治療するつもりだと言う。

この時のコラソンの行動が、ローの〝命〟と、そして〝心〟をも救う事になろうとは、この時のローには思いもしない事だった…!!



▲「イジメ」とも言える行為を繰り返すコラソンに対し、ローの怒りは溜まるばかり。だが実は、コラソンは子供をファミリーから引き離す為、嫌がらせをしていた様だ。

トラファルガー・ローの知られざる物語が次のページからスタート!!


ONE PIECE
novel
連載小説 第1話
恩人から受け継いだ
〝心〟を〝掟〟と刻み、
少年ローは己の道を
歩き始める。
著/
坂上秋成
Shusei Sakagami
イメージイラスト/
アシュレイ・ウッド
Ashley Wood
LAW
W
AFTER
SCHIELE
18



Illustration Tatsuyuki Tanaka

TRAFALGAR.LAW Commentary
Vol.2



トラファルガー・ローの幼年期が描かれた小説、『ONE PIECE novel LAW』。〝珀鉛病(はくえんびょう)〟の悲劇に見舞われ家族を失い、憎しみに身を焦がした彼は、一人の男の大いなる犠牲の下に、〝オペオペの実〟の能力と自身の命、そしてあらゆる束縛からの「自由」を手に入れる事となった。



▲各地の病院を巡るロー。だが〝白い町(フレバンス)〟の名を口にするだけで、医者は恐怖に身をすくめる。偏見は人々の心を蝕んでいた。

恩人・コラソンと〝奇跡〟を求めて――

「コラソン」ことドンキホーテ・ロシナンテは、トラファルガー・ローを伴い、各地の病院を巡る。

しかし〝珀鉛病〟患者に対する誤解と恐怖がもたらした偏見は、コラソンの想像を遥かに凌駕する胸糞悪さだった。医者達はローの出身地を聞くだけで恐れおののき、彼らを追い返そうとする。そしてその度にコラソンは怒り狂い、病院を後にする事となった。

六か月間の旅で、コラソンは打ちひしがれる。悲劇の町に生まれた少年に同情し、世界中の病院を回ることでトラウマとも言うべき悲劇を思い出させ、病状を改善する糸口も見出す事ができず、生きる希望すら与えてやれない。そんな、自分自身の無力さに…。

「あん時、お前おれを刺したけど…痛くもなかった……!!!痛ェのはお前の方だったよな…かわいそうによォ……!!! ロー…!!!」ある夜聞いたコラソンの慟哭は、ローの中の「何か」を変えた。以後彼は、コラソンを「コラさん」と呼ぶようになる。

翌日、コラソンの下に、ドフラミンゴからとある悪魔の実の情報が入る。

それは奇跡的な手術を可能にし、未知の病をも治しうるという〝オペオペの実〟の情報だった。既にコラソンの裏切りに気づいているドフラミンゴは、弟に〝オペオペの実〟を食わせ、逆らえない彼を犠牲に〝永遠の命〟を得るハラなのだろう…。そこでコラソンは「兄を出し抜き、医療知識を持つローに実を食べさせて珀鉛病を治療する」という計画を発案する。そして、コラソンはローの知らぬとある「電伝虫ごしの相手」…当時の海軍本部大将センゴクから、〝オペオペの実〟の闇取引情報を得る。

三週間後の〝北の海(ノースブルー)〟「ルーベック」。元海軍将校の海賊「ディエス・バレルズ」から、まんまと〝オペオペの実〟をせしめたコラソンは、ローの口に実を押し込み、その直後雪原に倒れ伏す。逃走の際、彼はバレルズら追手から夥(おびただ)しい量の銃弾を浴びていたのだった。

心配無用と笑うコラソンは、ローにある頼み事をする。西の海岸に着船する海軍監視船に、小さな筒を届けてほしいと言うのだ。海軍のマークが記された「情報文書」があれば、遥か遠方の国「ドレスローザ王国」を救う事ができるのだという。

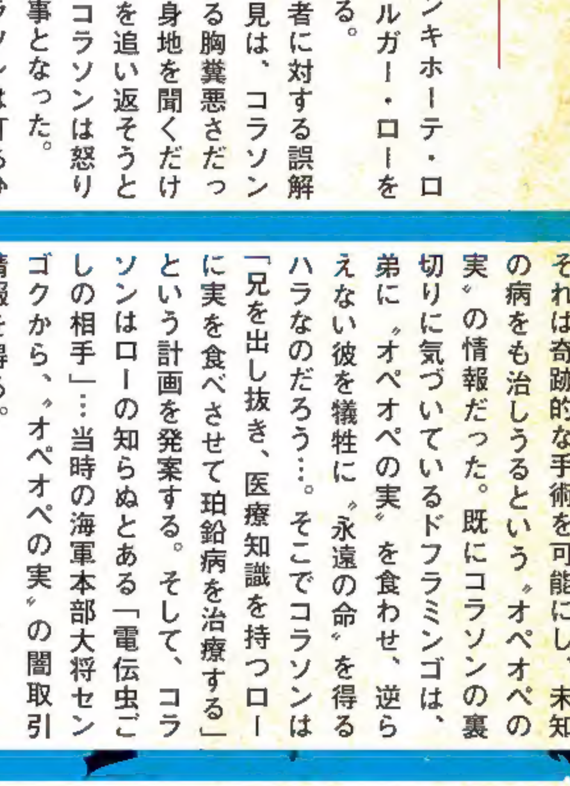
海岸に赴いたローは、筒を届けた海兵にコラソンの救助を懇願。鉢合わせたコラソンとその海兵は、互いの「極秘任務」について理解する。コラソンの任務はドンキホーテ・ファミリーへの潜入。そして件の海兵「ヴェルゴ」の任務は、海軍への潜入だったのだ。運命の皮肉か、生まれついての不運か？ 噛みしめながらコラソンは、ローだけを島から無事に脱出させようと誓う。

「おれはドフィと血を分けた兄弟。そりゃブチ切れられるだろうが…殺されやしねェよ」

コラソンの提案で宝箱に身を隠したローは、その外で交された兄弟の会話を聞く。コラソンの正体が、海軍本部ロシナンテ中佐である事。ドフラミンゴは〝オペオペの実〟を食べたローを、自分の為に命を捧げられるよう再教育する腹積もりだという事。そしてコラソンは、命懸けでローに自由を与えるつもりだという事を…。

「もう放っといてやれ!!! あいつは自由だ!!!」

次の瞬間、ローは宝箱の外で鳴り響く銃声を聞いた。



▲コラソンは、珀鉛病からも、〝オペオペの実〟の能力を利用しようとするドフラミンゴの陰謀からもローを解き放った!!

ONE PIECE novel

前回のあらすじ LAW



北の海・スワロー島の夜

「となり町で落ち合おう」コラソンと交わした約束を胸に、ローは泣き声をあげながら雪の島を歩いた。「──死にたくない」ローは、コラソンにつないでもらった命をかみしめながら、約束の〝となり町・プレジャータウン〟へと向かう。だが、ローは町に入った途端に、かつての迫害の記憶を思い出してしまい、すぐに逃げだしてしまった…。

発動！〝オペオペの実〟の能力

海岸沿いの洞窟に身を寄せたローは、そこで珀鉛病(はくえんびょう)の発作を起こしてしまう。いよいよ死が近づく中、「おれが生き延びないと！あの人の死が無駄になっちまう！そんなのは嫌なんだよ!!」ローはメスを手に取り、意を決して自らの手術を開始する。そのとき、心臓が強く脈打ち、ドーム状のサークルが展開。ドーム内すべてを見通せるその感覚で、自分の身体の内側、臓器や筋肉、神経まで、手に取るように理解できた。それこそが〝オペオペの実〟の能力！鉛がたまっている臓器を切除したローは、なんとか命をつなぎとめる。そして意識を失った。

発明家の老人・ヴォルフ

気がつけば、見知らぬ家の温かいベッドで寝ていたロー。そこへアロハシャツの老人・ヴォルフがあたたかいスープを持って現れる。怪しんだローは思わずメスを向けて何者かを尋ねるが、ヴォルフは「ワシはおまえの敵じゃない」と動じない。さらに、スープを差し出してくる。ローはメスの代わりにスプーンを握り、気がつけば手渡されたスープを飲み干してしまっていた。ローは本当に助かったのだ。ヴォルフは町外れに住み、ギブ&テイクを信条とする発明家だった。ヴォルフはローを子供扱いせず、発明のために働かせ、その分、寝床と飯を与えた。ローはヴォルフを「ガラクタ屋」と呼び始め、そんな距離感を心地よく思った。

白クマ・ベポとの出会い

ヴォルフとの生活に馴染み始めたある日、ローは、喋る白クマが二人の少年にいじめられているのを目撃する。ペンギン帽とキャスケット帽をかぶる二人の少年は、ローにも喧嘩をふっかけてきたが、ローは〝オペオペの実〟の能力でのしてしまう。そして、助けたその白クマのミンク族こそ、のちにハートの海賊団の航海士となるベポだった。ベポはゾウの島の出身で、姿を消した兄を探して新世界を越え、北(ノース)の海(ブルー)まで来てしまったという。航海術を学び、兄を探しにいきたい…だが当面の居場所がない…ローはそんなベポを子分にして、ヴォルフの家に連れてきてしまう。「そのでっかいクマはなんじゃああ!!」



シャチとペンギンを治療

三人での暮らしが始まって一ヵ月が経ったころ。突然、森のほうで爆発音が鳴り響き、ローとベポは駆けつける。そこには、以前ベポをいじめていた二人の少年、シャチとペンギンが瀕死の重傷を負っていた。森で暮らす二人は誤って爆弾を暴発させてしまったのだ。ローとベポは、すぐに二人をヴォルフの家に運び、手術を開始。シャチとペンギンはなんとか一命を取り留める。話を聞けば、シャチもペンギンも、ともに両親を亡くし、シャチの叔父叔母の家に預けられていた。だが、彼らを奴隷のように扱う叔父たちに耐えかね、家を飛び出し、森で暮らしていたのだった。シャチとペンギンは、その腹いせでベポをいじめてしまったのだが、それでも真っ先に助けてくれたベポに謝罪と感謝を伝える。そして、命を救ってくれたローを心から慕い始めた。

自由を見つけて

ヴォルフはそんな四人を見て、全員まとめて面倒を見ることを宣言。ただし、生きていく場所を提供するかわりに、〝ギブ&テイク〟で発明と生活のための労働力を交換するのが条件だ。かくして、五人の奇妙な共同生活が始まった。ここでなら、コラソンが言っていた「自由」を見つけられるかもしれない…ローは新たな目的を見出し始めていた。

ローたちが見つける「自由」とは？次の頁から第2話スタート！


ONE PIECE
novel
LAW
連載小説 第2話
著／
坂上秋成
Shusei Sakagami
イメージイラスト／
田中達之
Tatsuyuki Tanaka
少年ローは
新たな"掟"をその手に刻み、
戦場へと向かう。
CANNABIS
大切に想えるやつ（仲間）を
生かすために——



Illustration　Kim Jung Gi

ONE PIECE novel

LAW

著／坂上秋成
Shusei Sakagami

イメージイラスト／キム・ジョンギ
Kim Jung Gi

連載小説 第3話

生かすこと。
それが彼の“掟”。





Illustration　Sana Takeda


ONE PIECE
novel
最終回
自らの掟に従い、
彼は守る。
著／
坂上秋成
Shusei Sakagami
イメージイラスト／
タケダサナ
Sana Takeda
連載小説 第4話
LAW